

## 能登半島地震における災害支援ナースの活動報告

杉田玄白記念公立小浜病院 秋長 健太

今回私は1月15日～1月18日の間で災害派遣支援ナースとして被災地に入った。避難所である輪島高校で活動を行った。私たちが避難所で任されたことは、避難所での感染対策や避難者の中で感染症を患っている方への対応、他の避難所からの感染症を患った避難者の受け入れ、病院への搬送が主な活動であった。避難所に入った時には COVID19、インフルエンザ、感染性腸炎などを発症された方々が各部屋に分かれ、10名程度であったが ADL が自立された方がほとんどであった。

翌日、朝から検温測定を行い、話を聞いてまわると脱水症状と酸素化が悪くなっている高齢の方がおり、避難所で観察することは明らかに困難な状態であった。避難所には毎日 DMAT が回診に来ていたため、診察してもらった結果、病院への搬送が望ましいという判断になり、救急要請後に病院へ一緒に搬送した。普段の病院であれば医師に報告を行い、点滴、酸素投与、検査など次の対応ができる状況であるが、避難所という場所は必ずしも医師が常駐しているわけでない。そのため、今回はたまたま日中で DMAT の回診前の出来事であったが、もし夜間等であれば、私たちが救急要請の判断をして病院へ搬送するということが必要なのだと実感した。

現地に入って3日目には解熱され隔離期間からも解除される方がいる一方、新たに COVID19 など陽性となる方もいた。さらには他の避難所で感染症を発症された避難者の受け入れも行った。皆、家族単位で避難されていることもあり、誰か一人が発症するとその家族も濃厚接触者ということで一緒に隔離を行う必要もあり、日に日に感染症が蔓延していると感じた。年齢も小児から90歳を超える高齢の方まで広くおられ、その中にはせん妄が出現し、頻回に訪室して対応するということもあった。感染予防の観点からは、限られた物資や環境の中で感染症対策も行うことから病院で行うような完全なゾーニングもできないが、私たちがこまめにトイレや身の回りの掃除、消毒を行うことはもちろん、感染症を発症された避難者の方々に手指消毒や次亜塩素酸ナトリウムでの消毒指導なども行い、感染症の拡大予防に努めた。

最後に、DMAT、国際医療 NGO 団体などの方々と一緒に活動をし、被災地での活動は限られた

物資、環境の中で様々な人たちが介入しているからこそ、連絡や報告などをより密にとり協力していくことが避難所運営で本当に大切なのだと感じた。

